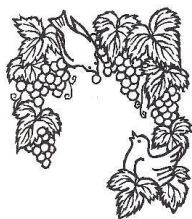


「MARIANISTES」100号 記念特集



会報「MARIANISTES」終刊のご挨拶

マリアニストファミリーの皆様には、兼ねてからご案内の通り「会報マリアニスト」は100号を以って終刊となります。

これまでご愛読頂きまして、誠にありがとうございました。またこの間のご支援・ご協力・ご理解賜りましたことを心より御礼申し上げます。

この会報誌はMLC最初の奉獻者が誕生した年（1992年10月）に創刊されました。

初代の編集長には小原忠郎さん、編集責任者として梶川神父様が就任されました。共に帰天されましたが、そのときから今年で17年になります。まさに「光陰矢のごとし」です。

私と会報誌との出会いはマリアニストファミリーの創設者・シャミナード師のカリスマによる賜物と思っています。師は修道会設立の前に一般信徒の会(マリアニスト信徒共同体：MLC)を創設されましたが、これは他の修道会創立の歴史とは明らかに違っています。この使命に惹かれ奉獻の恵みに与り、ごく自然な成り行きで会報誌のお手伝いをするようになりました。この間マリアニストファミリーの様々な出来事を編集し、お伝え出来たことは編集者冥利に尽きます。そしてこの間、ご指導頂きました富来神父様、清水一男神父様、シスター小林、また編集作業に携わってこられた部員の皆様にはこの紙面をお借りして衷心より感謝申し上げます。

また、会報マリアニストに関するアンケートに付きましては忌憚のないご意見を頂きました事を御礼申し上げます。10月31日現在、メール・郵送・FAXなどで15通寄せられました。その内容は、編集に対する意見・要望などで厳しいご意見もありましたが、8割の方が「継続を希望する」でした。また編集部員の中にも継続を希望する方が複数居ります。問題を提起した当事者としては正直申し上げて、戸惑いも有りますが嬉しさもあります。

これらのご意見を参考に、最終的には家族評議会の判断に委ねることになりますのでその結果をお待ち頂きたいと思えます。

ここに、お寄せいただきました何人か方々の思い出やご感想を、特集として掲載させていただきます。ありがとうございました。

2009年11月15日

編集長 石井 三雄

「マリアニスト」100号発行を 迎えるにあたって。

富来正博

1993年5月に発行された「マリアニスト」の創刊号挨拶に、マリアニスト共同体間の情報を交わし、交流を深めることを目的としてマリアニストを発行するとあります。そのときから16年の歳月が過ぎました。マリアニスト共同体も2から13と飛躍的に増加し、活動も国際的になり、海外援助、韓国の共同体との交流などと多様な働きをしています。それらを支えるマリアニスト誌の役割は決して小さなものではありませんでした。今回100号発行を迎え、初代編集長故小原さんの「何とかして100号までは続けたい」との念願を達成することができました。歴代編集長の故小原忠郎さん、石井三雄さん、印刷から発送までの作業をしてくださった編集員の方々に心からのお礼を申し上げます。101号からどのような内容、体裁になるかは編集委員会で検討中ですが、読者層もマリアニスト共同体を超えて広がってきた現在一工夫が必要でしょう。楽しみにしています。



「マリアニスト」100号によせて

Sr.高尾チエ

おめでとうございます。
始めるより続けることの方がむつかしいといわれますが、全くその通りだと思います。
“マリアニスト”の編集、印刷、発送と惜しみなく奉仕して下さった方々にお礼を申し上げます。手軽に読める家族の手紙のように、いつも心待ちにしています。
マリアニスト家族を知らせるよい機会になればと願いつつ、何人かの友達に手紙を添えて送っています。昔の友達の近況がわかったり、お見舞いや喜び悲しみを分かち合うことができ幸いです。また、福音宣教のマリア的手段として利用させていただいています。コミュニケーションに役立つこのマリアニスト紙に、私は関心と期待をよせています。マリアの精神でひとつに結ばれている私た

ちが、互いにもっと知り合う機会があればよいなと思っています。それぞれ忙しく、遠く離れているので、尚更なのかもしれません。

しかし、私たちがマリアニストとして各自の身分、生活の場で精一杯よるこんで生きていくなれば、マリアニストとして一致してその使命を果たすことが出来るという確信が、私たちを勇気づけてくれます。マリアニスト家族の成長、発展を心から願い、明日に希望をかけて歩いていきたいと思います。

“マリアニスト”の編集に長年ご尽力下さった故小原先生に感謝しつつペンを置きます。



雑 感

寺沢 圭子

100号、おめでとうございます。心より感謝申し上げます。

ここ町田修道院の編集室にて創刊号より刷られているとのこと、一層、感を深くしております。なぜなら、FIAT（フィアト）は月例会を同じ部屋で、印刷機などに囲まれている中で、学んだり、分かち合ったり、輪読したり、お弁当を頂いたりしているものですから。

100号に至るまでの間に、3回ほど編集室へピンチヒッターとしてお手伝いに参りました。その折、みなさんの流れるような手順に舌を巻きました。本当にご苦労様と思ったものです。準備の効果とも思いました。

シオン、ソダリティ、わがフィアトは、今や古株の方になり、共同体が憶えきれないほどに、お仲間が増えました。創設当初のMLCの礎である規約づくりには、長濱先生の熱意に動かされて、九段下のシャミナード修道院に通ったものでした。また、歴史的なシャミナード師の列福式（ヴァチカン）に、マリアニスト家族で参加できましたのも、100号までの中の出来事として印象深いものでした。



「マリアニスト」によせて

栄 秀人

「マリアニスト」がこの11月で100号

となります。この100号を目指して、私たち広報部員は今日までがんばって参りました。前編集長の故小原忠郎さんが、作業中いつも、口癖のように、「100号まではどうしてもやらなきゃ」と言っておられた“その日”が、とうとう来たのです。16年あまり経って、小原忠郎さんの念願が達成したのです。私もうれしいです。

ここに至るまでには、艱難辛苦を乗り越えて、みなが心をひとつにして、神様の助けを願いつつがんばってきたのです。いまは、小原忠郎さんも天国で喜んでおられることと思います。

富来神父様、清水神父様、Sr. 小林、現編集長の石井さんご夫妻などのご尽力と、編集部員一同の協力がなかったら、達成は難しかったのではないかと思います。すべては、作る方、読んで下さる方の双方のご協力の賜物と、感謝しています。これに関わられた一人として、本当にありがとうございますと思っております。



私と「マリアニスト」

七條美鈴

古い手紙を見返していたら、その中に、シスター関根の手紙があった。高校卒業を控えて、私がおの後の進路に迷っていることを、シスターが心配して下さっている文面から察すると、今から約20年位前の手紙と思われる。シスター関根とは度々手紙を取り交わしていたようで、「汚れなきマリア修道会」創立175周年を記念する式典にお誘い頂いている内容の絵はがきなども出てきた。懐かしくて読み返していたら、ある手紙の一部分にふと目が留まった。

「・・・悩んでいた進路は決定しましたか。健康に留意してください。人生における第一のハードルを越えるために、悔いを残すことのないようがんばってください。しかし、失敗しても、神様があなたに望むことは何なのか、むしろ、よく解るきっかけになることもありますから、心配しないでください。・・・ シスター関根清恵」

あれから20年も経っているというのに、今の私に届けられたメッセージのように新鮮だった。

あの当時、交流を持っていた修道会が他にもあって、その会のシスターからは、高校を卒業したらすぐにでも修道院に来るようにすすめられていた。どうしたらよいのか自分でもよく分からないまま、当面の目標であった演劇の世界へ進み、「劇団四季」で舞台照明の仕事に携わっていた。しかし、大きなケガをしたり、仕事のストレスで体調を崩したりして、約1年で退団してしまったのである。

結局、やりたかった事も途中で投げ出し、その後、やりたい事といっても特に見つからないまま、いくつも職を転々としながら、月日は流れた。気がつけば、教会からも離れ、修道会からも遠ざかってしまっていた。

しかしその間も、「マリアニスト」は途絶えることなくずっと送り続けられていた。それをただ黙って読んで、あまり関心も示さず隅に置く。置き続けて、ある程度溜まってくると、処分する。どこかで、私はもう関係ないと思っていたからだ。それでも送り続けられてくる・・・もう止めてもらおうか、と思ったこともあった。

独り暮らしを始めて、二度目の引っ越しの時、きっと、「マリアニスト」編集部に住所変更の届出をしていなかったせいであろう、郵便局の転送サービスが終了したと同時に、それがぱたりと届かなくなってしまったのである。まさかそんなことになるとは知らず、その途絶える直前に送られてきた「マリアニスト」を、いつものように眺めていた。まず、最初から読み進めていって、いちばん最後のページをくるっとひっくり返す。すると、罫線で四角に囲まれた部分が、まず目に入ってくる。・・・なんとそこには、シスター関根が亡くなられたという事が、淡々と伝えられていたのであった。

それきり「マリアニスト」は届かなくなった。その上、私の知らない中に、あの時人生について一緒に考えてくれたシスターも亡くなってしまった。なんだか急に、このまま

にしておいてはいけない様な気がしてきたが、空白の時間が余りにも長すぎて、どうしたらよいか分からない。そんなある時、シャミナード修道院の「祈りの集い」のを知り、行ってみると、そこにいらしたのがシスター小林だった。紙面上でお名前だけは存じ上げていたが、なにしろ集まりに一度も参加したことがなかった為、名前と顔が一致しない。私の名前を聞かれて、答える。するとなぜか、名前だけは覚えていて下さっているようだった。なんだか、初対面の他人であるのに、他人でないような、おかしい感じがした。ただ、「その時」が来るまで、見えない縁だけはずっとつながっていたのだ、ということ強く感じた。

私はいま、シスター小林と共に、「マニフィカト」のメンバーに巡り会い、皆さんと一緒に、月に一回、町田修道院で勉強するようになった。これまでの自分を振り返ってみると、頂いたこのご縁が不思議でたまらない。町田修道院のくねくねした坂道を登り切ると、20年前のあの時と同じように、扉の向こうでシスター関根が迎えてくれるような気がしている。だから、心の中で「シスター、また来たよ」と語りかけてみる。

ずっと私をつなぎ続けてくれた「マリアニスト」は、100号の節目を迎え、一旦区切りをつけることになった、と紙面は伝えていた。継続の是非を問うアンケートに対しては、どんな形でも構わないので、「希望する」と答えたい。なぜなら、私のような、こんな人間もいるからである。続けていれば、またきっと、どこかで誰かをつなぐことがあるのかもしれない、と思うからである。

私たちの都合ではなく、こんな時、マリア様だったらどのようにお考えになるだろうか、ということに思いを巡らせてみたい。なんだか、ここで終わらせてはならないような気がしている。



この十余年を振り返って

上野 圭一

『マリアニスト』編集員としては、編集後

記その他の原稿を書く以外は、専ら印刷や発送といった事務的な作業を編集部の方々やってきました。直接内容や編集にかかわる知識も能力も持ち合わせていなかったのも、その点では戦力になれず、皆さんのお荷物になっていたのではないかと反省しています。したがって、編集部やマリア会関連の活動を通しての、今の個人的な思いについて述べさせていただきます。

僕がこの広報に関わり始めたのは、編集と同じく町田修道院で催されていた「若い人々の黙想会」からの流れでした。初めは、各グループの活動を越えた人間関係を築くことができるなどとは予想も期待もしていませんでした。ただ、教会活動の中でお世話になった方々のお手伝いが少しでもできれば、という程度の気持ちから両団体に参加していたというのが正直なところでした。それから十年余りが経ち、黙想会は解散し、『マリアニスト』も終刊の時を迎えました。振り返ってみれば、マリア会の求心力というものを強く意識させるような体験がいくつかあったと思います。バード・バカラックの作品‘I say a Little Prayer’に唄われているような、日々当たり前前に他者のために祈るといった行為を目の当たりにしたのも、またそれが常に実践に裏打ちされていることが経験できたのも、広報や青年黙想会での得がたい人との関わりからでした。そしてこれらの活動を通して「信仰のバランス」について考えることができました。他人なればこそお互いに親身になれるような関わりもできました。当時から家族といえ一匹の猫しかいない身としては、これもとてもありがたく救われる思いでした。「マリアニスト家族」という言葉はその文言において間違っていないと思います。創刊より16年、故小原忠郎初代編集長をはじめ多くの人々の尽力と読者の皆様に支えられて100号を迎えた『マリアニスト』もその役割を終えました。これからは新しい形で皆様と歩んで行ければ、と念じています。どうもありがとうございました。